様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５００７４０

研究課題名（和文）学校と総合型地域スポーツクラブによる「新しい公共」の創出過程に関する研究

研究課題名（英文）Study on the process of creating "new public" by comprehensive community sports clubs and school

研究代表者
谷口　勇一（Taniguchi, Yuichi）

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：５０２７９２９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、部活動と総合型クラブの関係構築動向における「新しい公共」の創出過程およびその内容について把捉理解することを目的とした。具体的な研究方法としては、部活動と総合型クラブの関係構築を意図した動きが生じた事例を取り上げ、参与観察と関係者へのインタビュー調査を実施した。
当該事例においては、部活動と総合型クラブ間の関係性は結果的に消滅したものの、関係構築動向によって、「教員の学校外地域に対する関心度の高まり」「地域住民の学校（教員）に対する親近感」等の意識変化を確認した。すなわち、当該事例においては、学校と地域がともに子どものスポーツ環境を創造する気運（新しい公共）の醸成・創出がみられた。

研究成果の概要（英文）：In this study, author aimed to be gripped understand the content and the process of creating "new public" in the relationship-building trends in the comprehensive community sport club and extracurricular activities. As research a specific method, and take up the example of movement that is intended to build relationships comprehensive community sport club and extracurricular activities has taken place, were interviewed survey of stakeholders and participant observation.
In this case, the relationship of the comprehensive community sport club and extracurricular activities disappeared as a result, but by the relationship-building trend, "growing degree of interest for out-of-school community of teachers' affinity for (teachers) school of" local residents I confirmed the change in consciousness-sensitive "and the like. In other words, in the case, building and creation of (new public) momentum regional and school to create a sports environment for children both was observed.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：学校運動部活動　総合型地域スポーツクラブ　新しい公共　協働関係　スポーツ社会学　スポーツ政策

１．研究開始当初の背景

わが国におけるスポーツ政策をめぐる喫緊の課題の一つに、「ライフステージに応じたスポーツ機会の創造」が存在する。全国的に普及しつつある総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）は、地域住民個々のライフステージに応じたスポーツ機会を保障する「場」としての期待感が高まろうとしている。

一方で、総合型クラブをめぐる今日的課題も見出されつつある。その一つが学校運動部活動（以下、部活動）との関係である。近年の少子化傾向に伴い、部活動は、部員数の減少と廃部の増大、顧問教師の高齢化といった各種問題点をみることとなり、複数校合同チームの編成や外部指導者の積極的活用といった対応策が講じられてきた。すなわち、今日の部活動は、学校のみでの運営形態に留まることなく、学校外地域との連携協力関係にもとづく運営形態を指向すべき状況を迎えているにも関わらず、実際には総合型クラブをはじめとした地域スポーツ活動との積極的な関係性構築を指向するには至っていないのである。文部科学省から出された「スポーツ立国戦略―スポーツコミュニティ・ニッポン」にみられる、学校・地域間連携の充実発展を視野に入れたコミュニティスポーツ（総合型クラブ）推進施策の出現は、各種問題点を抱えつつ、学校のみでの運営形態に終始してきた部活動制度をめぐる変化の契機として期待したい。

以上に鑑み、学校・地域間連携による総合型クラブ展開をめぐる「新しい公共」の創出内容とその創出過程を事例的に把捉する作業は、スポーツ立国戦略に掲げられているコミュニティスポーツ育成の推進に向けた基礎資料となるばかりでなく、スポーツ活動を契機とした新たな学校と地域の関係性を見出させる可能性を秘めている。

２．研究の目的

上述した本研究を取りまく背景を踏まえ、本研究においては、学校部活動を中心とした総合型クラブ展開がなされてきた大分県大分市の「七瀬の里Ｎクラブ」と「野津原中学校内部活動」を事例として取り上げ、①学校と地域の協働関係構築をめぐる作業経緯を把捉し、②学校・地域間連携を基礎とした総合型クラブによる「新しい公共」の創出内容とその創出過程を把捉理解すること、を目的とした。

３．研究の方法

(1)対象事例の概要

研究対象とした事例（大分市野津原）は、2004 年に大分市と合併し、約 5000 の人口を有する。当該地域には小学校 3 校、中学校は野津原中学校 1 校のみが存在し、中学生世代のスポーツ活動は部活動が一手に担ってきた。野津原中学校の部活動を取りまく状況は、全国的な潮流と同じく、少子化による生徒数の減少や教職員の高齢化といった問題が噴出し、部活動数の減少傾向を確認している。

以上のような状況の中で、2003 年に野津原中学校保健体育教師として A 氏が赴任することとなる。A 氏は当該校赴任以前から、居住地であった当該地域の体育指導委員（現在も大分市スポーツ推進委員）に就任していた。A 氏は、脆弱な状況にあった野津原中学校部活動の再生の方途を総合型クラブとの関係に見出すべく、教員と地域のスポーツ指導者という二つの立場から、当該地域における部活動を中核とした総合型クラブ育成へと積極的に関与した。

「地域のクラブと学校運動部活動が一体となり、子どもを中心に据えた地域スポーツ文化活動の構築」を主な活動理念として、「七瀬の里 N クラブ」は 2005 年に設立された。当該クラブ活動においては、平日の部活動への N クラブスタッフの派遣、休日の部活動はすべて N クラブ活動としての実施、等のシステムを確立し、学校と地域の協働関係にもとづく活動の形態を確立するに至った。しかしながら、学校と地域の協働関係にもとづくスポーツ活動形態は、2009 年に発生した活動中の事故により消滅に至った。それ以降、野津原中学校生徒のスポーツ活動は、部活動と「七瀬の里 N クラブ」の選択が為されることとなり、その大部分が総合型クラブ活動への傾斜をみるに至る。

結果として、総合型クラブと部活動の有機的な関係性については消滅をみることになったものの、中学生世代のスポーツ活動を総合型クラブが担う状態に至った当該地域においては、教員ならびに地域住民の意識に「新たな価値観」が形成される契機となり得た。

(2)参与観察およびインタビュー調査

2011（平成 23）年から 2012（平成 24）年にかけて、「七瀬の里 N クラブ」ならびに野津原中学校部活動の参与観察を実施した。そこでの視点は、中学生のスポーツ活動環境の変化に伴う教員と地域住民の意識変化に向けられた。すなわち、総合型クラブによる中学生のスポーツ活動を通して、当該地域住民ならびに教員においては、いかなる課題と可能性を感じることになったのか、を把捉することが目的とされた。

当該期間においては特に、野津原中学校に勤務する（勤務した）教員 6 名ならびに地域住民 6 名を対象としたインタビュー調査を合わせて実施した。調査内容は主に、総合型クラブとの関係に伴い生じた各種の意識変化に焦点化した。そのことは、部活動と総合型クラブの関係構築過程に伴い生じたと考えられる、スポーツを通じた「新しい公共」内容の把捉理解に通じている。

(3)質問紙調査

2013（平成 25）年においては、前年度まで実施した参与観察およびインタビュー調査

を踏まえ、総合型クラブが地域（住民）にもたらすこととなった各種の影響力および創出されている「新しい公共」内容を把捉する目的から、大分県内における住民意識調査を実施した。調査期間は、2013（平成25）年6月10日～28日であり、対象者数は6000名とした。なお、本調査研究にあたっては、大分県教育委員会体育保健課の全面的な協力のもと実施された。

４．研究成果

以下ではまず、2011（平成23）年から2012（平成24）年にかけて実施した参与観察ならびにインタビュー調査から得られた部活動と総合型クラブの関係のより創出されたと思われる、スポーツを通じた「新しい公共」の諸相について述べる。

(1)教員の地域資源に対する期待感

総合型クラブとの関係が構築され始めた2005年当時、野津原中学校に勤務していた教員6名に対するインタビュー調査を実施した。特徴的なコメントを示す。

「私自身は大歓迎でした。A先生の熱意は地域の熱意だと感じました。学校の部活動は生徒にとって大切な活動です。しかし一方で先生方には大変な負担が伴っています。学校は地域との連携で運営されなくてはならない。あのときのNクラブの話は、まさに学校と地域が一体になれるきっかけだと感じました。先生方の多くも充実した部活動運営、そして子どもたちが満足できる部活動ができると喜ばれていたと思いますよ」（B氏）

上記コメントに同調するがごとく、部活動と総合型クラブの関係構築を主導したA氏からは以下のようなコメントを得た。

「先生たちにとっては、好都合だと感じた人が多かったはず。特に女性の先生は渡りに船といった感じだったみたい」（A氏）

以上2名のコメントからは、野津原中学校内教員の意識の中に、Nクラブ（総合型クラブ）との関係構築に対する期待感、換言すれば、学校外（地域）資源の活用ならびに連携による期待感が存在していたことが推察された。そのことは、当時の野津原中学校生徒指導部部活動主任であるC氏のコメントに象徴的である。

「私自身教員になって20年近くになりますが、正直、勤務校周辺地域の方々との関係を緊密につくりあげるようなことはなかったです。地域の方が本格的に学校（部活動）の指導に関与される、教員も地域（総合型クラブ）の活動に関与する、といった関係の中で、学校は地域との関係の中で、生産的な活動が可能になるのかもしれないなと感じました。しかしながら、ここ（野津原中学校）では、A先生がそのような動きを起してくださいましたが、他の学校ではなかなかそういった動きは起きていません。学校（教員）の課題の一つなのだと感じています」（C氏）

以上のコメントならびに他の教員からの聴き取り等を踏まえ、当該地域においては、特に学校（教員）意識の中に、学校外（地域）との連携関係構築の必要性が是認される契機となり得たといえよう。しかしながら、2009年に発生した活動中の事故を契機として両者（部活動と総合型クラブ）の関係性は消滅し、新たな地域スポーツシステムの再構築が模索されている。そこでもなお、Nクラブ（総合型クラブ）活動に参加する生徒たちへの学校としての支援が検討されている。当該地域においては、生徒たちにとって好ましいスポーツ活動環境の構築を、学校と総合型クラブが共同で検討する雰囲気とシステムが成立しているのである。そこに、スポーツを通じて創出された「新しい公共」の一部を確認することとなった。

(2)学校（教員）を身近に感じる住民

Nクラブ（総合型クラブ）活動に子ども（中学生）を参加させている保護者6名に対するインタビュー調査を実施した。調査対象者からは、異口同音に「学校（教員）は、地域のことなど気にしていない（気にする必要がない）と思っていたが、Nクラブ（総合型クラブ）との関係が生じたことにより、学校（教員）が身近になった」との言を得た。

なかでも、特徴的なコメントを得るに至ったD氏の言葉を引用したい。

「いまはもう子どもが中学校を卒業しましたから直接的に学校（先生方）との接点はありません。子どもが学校に通っているときは、学校のことが気になるものでしょ、でも卒業したらもう終わり（気にならない）というのが普通だと思います。しかし、ここでは（当該地域）、Nクラブの活動に学校の先生方がときどき関わられていますし、校長先生はクラブの役員でもある。子どもは卒業しましたが、先生方が関わり合いをもっていることもあり、野津原中学校のことが気になりますよね。Nクラブをきっかけとして野津原中学校の活性化に向けたお手伝いを私もできないかと考えるようになりました」（D氏）。

また、Nクラブ会員であり、高齢者であるE氏からはつぎのようなコメントを得た。

「地元の学校のことは気になるものです。つぎはどんな先生が来られたのか、あの先生はどこに異動されたのか、など。でも、先生方は地域の事はあまり気にされていなかったはず。Nクラブができて、中学生が部活動ではなくNクラブで活動するようになって、必然的に先生方もNクラブに関わり合いを持たざるを得なくなって、私たちも先生方の顔がよくわかるようになりました。先生たちの知恵を地域の行事に反映できるようにもなりました。先生方の専門的な知恵や知識を地域に還元してもらえたことがなによりもよかったと感じています」（E氏）

以上の地域住民の声に鑑みたとき、当該地域においては、住民意識の中に「学校を身近に感じる」気運が高まり、教員とともに、子どもたちを育む必要性が自覚されることと

なったといえよう。結果的には生産的な部活動と総合型クラブの関係性を継続するには至っていないものの、関係性の構築を事実として検討・実施してきた経緯は、当該地域の中で大きな意味を残したのである。

(3)当該事例で創出された「新しい公共」内容とは

「新しい公共」が目指すところは以下に集約できよう。すなわち、「全ての人に居場所と出番があり、みなが人に役立つ歓びを大切にする社会」である。

部活動と総合型クラブの関係構築をめぐる「新しい公共」の視座は、まず、①すべての子ども（生徒）たちがスポーツを通じて適切な居場所と出番があること、に他ならず、②そこに関与する大人（教員と地域住民）が子どもたちの教育に役立つ歓びを共有できる、状態なのではなかろうか。

当該事例においては、子どもたち（生徒）のスポーツ活動の選択肢が充実されるに至ったこと、また、そこでは、学校（教員）による指導と地域（住民）双方による指導体制が確立された点に特徴点を見いだせよう。すなわち､野津原中学校とＮクラブにおいては、上記したように、地域住民の学校（教員）に対する意識が変化し、なかでも、学校（教員）との共同作業に対する意識が前向きになった点にこそ、「みなが人に役立つ歓びを大切にする社会」に向けた契機をみよう。換言すれば、当該事例からは、スポーツを通じた学校と学校外（地域）の共同作業および協働関係の構築に向けた可能性を確認することとなり、今後のスポーツによる「新しい公共」の研究（検討）視座をもたらしてくれたといえよう。

しかしながら、部活動と総合型クラブの関係性を構築する事例はさほど多くは存在しない。当該研究期間に得られた知見を踏まえ、2013（平成 25）年度においては、現状の総合型クラブが地域住民にとっていかなる意味を有しているのか、そこには、いかなる「新しい公共」が創出されつつあるのか、を検討する目的から質問紙調査研究が実施された。以下にその結果を報告する。

(4)総合型クラブに対する認知度

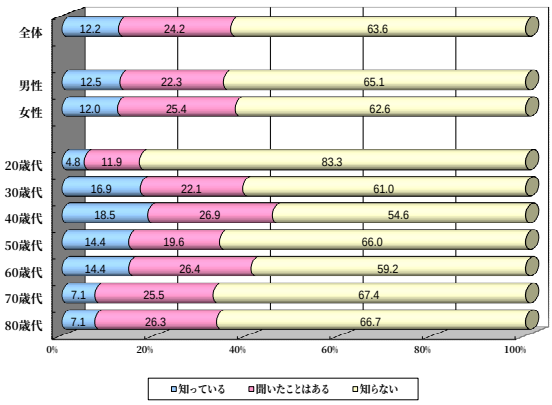

図１ 総合型クラブに対する認知度

調査対象である大分県においては、全市町村に１つ以上の総合型クラブが設置されている。しかしながら、その認知度はさほど高いものではないことがわかった（図 1)。なかでも、年代別にみた「20 歳代」においては、認知度がかなり低い状況にある。

(5)総合型クラブに対する評価

総合型クラブに対する認知度を有する者を対象とした限定質問を設定した。まず､「あなたが知っている身近な総合型クラブは盛んに活動していると思いますか」なる質問に対する回答結果をみたい（図 2)。

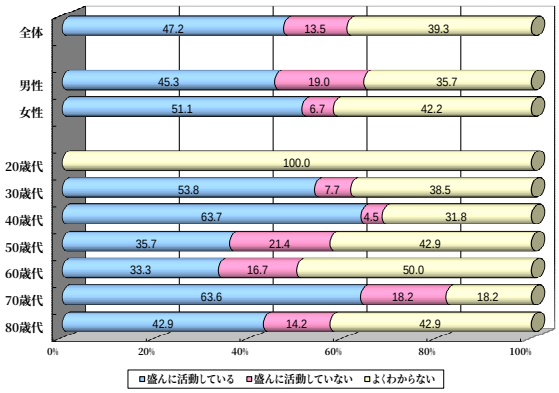

図２ 総合型クラブに対する評価

「20 歳代」においては、総合型クラブに対する評価が得られない状況となった。当該年代においては、総合型クラブ会員の割合が引くことも関係するであろうが、この点については今後の各クラブの課題を反映した結果の一部といえよう。

一方で、その他の年代においては、比較的に「良好な」評価の状況にあると言えなくもない。「盛んに活動している」と評価した者に訊ねた自由記述回答の内容をみると、「地域住民のスポーツに対するニーズの把握がしっかりと為されている」「地域課題に対してスポーツがどのように貢献できるのかがクラブによってしっかり検討されている」「クラブ存在によって、行政が実施してきた行事が活性化してきた。また、クラブが行政の構造を変化させようとしている」などの内容とともに、本研究の主眼である部活動との関係性については、「不安定な状態にある学校の部活動に対する積極的な働きかけがクラブによって為されようとしている」「地域の子どもたちのスポーツ環境を総合型クラブが真剣に検討しようとしている」「総合型クラブが学校に働きかけて、子どもの体力向上をはじめとした、スポーツ活動環境の整備に着手しようとしている」などの内容を確認した。

総合型クラブ活動においては、各クラブを取りまく地域事情により、活動のコンセプトにも違いが存在する。しかしながら、多くのクラブにおいては、地域の子どもたちのスポーツ環境整備に向けた各種取り組みが指向されていることが明らかとなった。

(6)総合型クラブの地域貢献度

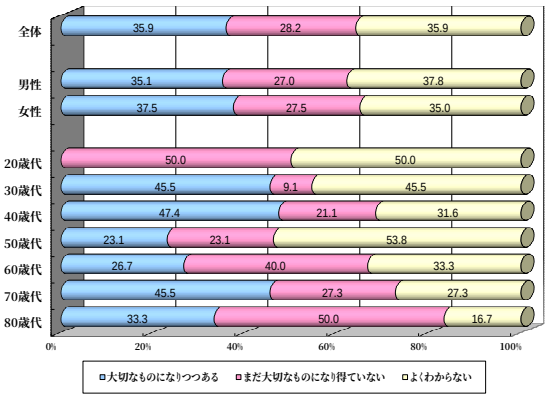

図 3 総合型クラブの地域貢献度評価

住民の総合型クラブに対する評価を「地域貢献度」の視点から訊ねた。総合型クラブが「地域にとって大切なものになりつつある」との回答は全体で 35.9%となった（図 3）。しかしながら、図 2 同様に「20 歳代」の数値は他の年代と比較して顕著に低いことがわかる。

では、いかなる要因・要素を以ってクラブの地域貢献度が評価されているのか。上述同様に自由記述内容から検討する。特徴的な記述内容は以下の通りである。すなわち、「クラブのスタッフのみに留まらず、地域住民の多くがクラブのために何ができるのか、何をお手伝いすべきなのか、についてクラブ側から頻繁にアクションが起こされている」「クラブの存在によって、地域経済の活性化が見られ始めているような気がする。具体的にはクラブが他の市町村や県外の団体を合宿等で誘致し、地元住民との交流機会等をつくってくれている」「いまや、地元の行政、特に社会体育の担当部局は、総合型クラブに地域スポーツ振興のノウハウを教授してもらっている状況だと思う。そのことは住民主導のスポーツ振興の表れであると思っている」などである。なかでも、学校（部活動）との関係に焦点化したコメントとしてはつぎのようなものがあげられる。「総合型クラブは部活動への接近を本格的に検討しているようである。子どもたちにとってそのような動きは大変重要なことであろう」「私の地域の総合型クラブはスタッフに学校の先生方をなかば強制的に入れているようです。先生方には気の毒かもしれませんが、私たち住民にとってはクラブ活動をきっかけとして学校の先生方との交流機会が得られ、とても良いことだと感じています」。

以上の結果を踏まえ、総合型クラブによる「新しい公共」の創出状況は、いまだ緒に就いた段階にあるといえよう。しかしながら、N クラブで生じた学校（部活動）との関係構築動向は、県内の他クラブにおいても、確実に意識化されており、今後の発展可能性を看取することとなった。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 谷口勇一、学校（教師）は総合型地域スポーツクラブをどうみているのか―新たなスポーツ政策と相対する学校の「揺らぎ」に焦点化して―、大分大学教育福祉科学部研究紀要、査読無、第 35 巻第 2 号、2013、pp.137-152

② 谷口勇一、部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討―「失敗事例」からみえてきた教員文化の諸相をもとに―、日本体育学会第 64 回大会体育社会学専門領域発表論文集、査読無、第 21 号、2013、pp.107-112

③ 山本浩二、谷口勇一、神野賢治、高等学校期における学校運動部活動の教育的有効性に関する調査研究、日本体育学会第 64 回大会体育社会学専門領域発表論文集、査読無、第 21 号、2013、pp.7-12

④ 谷口勇一、甲斐義一、汐池聡、学校との協働関係を意図した総合型地域スポーツクラブをめぐる課題の諸相―NPO 法人七瀬の里 N クラブにおける参与観察をもとに―、大分大学高等教育開発センター紀要、査読無、第 4 号、2012、pp.13-21

⑤ 谷口勇一、甲斐義一、総合型地域スポーツクラブ動向と部活動顧問教師をめぐる「揺らぎ」の諸相、九州体育・スポーツ学研究、査読有、第 25 巻第 2 号、2011、pp.1-10

⑥ 谷口勇一、内倉康二、住民主導を意図した総合型地域スポーツクラブ育成事業における「揺らぎ」の意味と構造、研究論文集―教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文、査読有、第 4 巻第 2 号、2011、pp.201-213

⑦ 堀仁史、内倉康二、長野力、谷口勇一、大在地区住民のボランティア意識に関する調査研究―総合型地域スポーツクラブへの積極的関与を促す手がかりの検討―、日本文理大学紀要、査読無、第 39 巻第 1 号、2011、pp.54-61

〔学会発表〕（計５件）

① 谷口勇一、過渡期を迎えた体育・スポーツ行政機構をめぐる「揺らぎ」の諸相―知事部局への移管動向に関する社会学的考察―、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会、2013 年 9 月 15 日、九州共立大学

② 谷口勇一、部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討―「失敗事例」からみえてきた教員文化の諸相をもとに―、日本体育学会第 64 回大会、2013 年 8 月 30 日、立命館大学びわこ・くさつキャンパス

③ 山本浩二、谷口勇一、神野賢治、高等学

校期における学校運動部活動の教育的有効性に関する調査研究、日本体育学会第 64 回大会、2013 年 8 月 28 日、立命館大学びわこ・くさつキャンパス

④ 谷口勇一、全体シンポジウムシンポジスト「学校・地域におけるスポーツクラブ革命―その動向・展開・発展課題―」「学校運動部活動の再生の視点として」、九州体育・スポーツ学会第 61 回大会、2012 年 9 月 8 日、宮崎公立大学

⑤ 谷口勇一、学校（教師）は総合型地域スポーツクラブをどうみているのか―新たなスポーツ政策と相対する学校の「揺らぎ」に焦点化して―、日本スポーツ社会学会第 21 回大会、2012 年 3 月 18 日、熊本大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
谷口　勇一（TANIGUCHI Yuichi）
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：50279296

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：